

進歩をうたがう方法

鶴見俊輔氏
〈哲学者〉



今、思い付いたことからお話しします。竹内さんの方法は、マックス・ヴェーバー (Max Weber) と対立して考えてみると大変よくわかります。竹内好という人は感情から出発します。竹内さんにとって日記というのは大変重要なのです。それから、箴言です。ことわざみたいなものです。

「偏見は楽しい、無知は楽しくない」。これは竹内さんの『転形期』という日記に出てくるものです。戦後に竹内さんが毎日のことを記したなかに出てくるわけです。これは竹内さんの同時代の日本の学問批判として大変優れていると思います。それがどこから出てくるかという毎日の感情なのです。

偏見というのは感情です。つまり、竹内好という人は、ここにずっと人がいても、どのような偏見を持っているかを見るのです。竹内さんにとって、面白い偏見を持っている人は、ただじっと凝視します。話しかけずに黙っているのです。

今の日本人のなかで言えば、竹内さんは大変に長く黙っていることに耐えられる人です。珍しいです。じっと黙っているのが大変恐ろしいです。左翼には、こういう人はほとんどいません。自由主義者にもほとんどいません。右翼にいます。まったく右翼の巨頭、遠山満みたいな人です。

昔、日本ではよくしゃべる人を軽蔑していました。あるときから、それは崩れました。今はもの

すごく崩れています。

偏見は楽しい。どのような偏見を持っているのか、じっとこうして見ているのです。「これは面白い偏見を持っている人だな」というと、じっと注目するというのが竹内さんの方法です。偏見は態度に表れます。このようなやり方で、同時代の学問を見るというのは大変に珍しいです。

マックス・ヴェーバーは、書かれたもので言えば非常に違います。つまり、学問というのは、書かれた学問として見るわけで、それは意味が確定できるものです。それがどのような偏見に根差していて、どのような偏見から表れてくるかということは、同時代の学問としては見ないのです。

ただ、彼のやった仕事自体は、その同時代の態度にいかにして根差しているかということで、彼自身も、ものすごく偏見のある人で、感情というのは大変重大でした。

彼はうつ病持ちでした。うつ病というのは自分の感情で決まってしまうのです。マックス・ヴェーバーの伝記を読めば、いかに彼が感情によって彼の学問もそこから出てきたかということがわかります。

しかし、学問の基準は、それはさらに同一と言ってもいいのですが、論理実証主義になると、はっきりとしたプロポジション (proposition)、命題がどのように構成されているかです。論理がかたち

として、そこで間違えばもう駄目なのです。

そうではなくて、経験にかかわることであれば、経験によって実証できるかによって見ます。例えば、ルドルフ・カルナップ (Rudolf Carnap) などは典型的なものです。これは竹内好の立てた基準、方法とは違います。

竹内好は、あの戦争のなかで、かなり中国語を読むようになってから魯迅に会います。はじめは郁達夫です。ずいぶんあとになって魯迅に会います。そして、魯迅のとりこになります。魯迅を読むことが、自分が生きることになるのです。つまり竹内好にとって、これは1930年代の日本ですが、そこに自分が立つことを支える力として魯迅があったのです。このような仕方、外国の文学、あるいは思想がある日本人というのはとても少ないです。とくに1930年代に少なかったです。今も少ないと思います。

そのように魯迅を読むわけです。そのことは自然に自分以外の日本人にとっての魯迅につながってくるのです。同時代の日本にとっての魯迅とは何か、そういう問題を立てて、日本人の生き方について竹内好は論評していきます。それがずっと死ぬまで続きます。本当に珍しいです。それは自然に、日本人にとっての中国という問題にぶつかります。戦争中だけではなく、戦後にも同じ問題を立てていきます。そうすると、いくらでも問題が出てくるのです。最後には、かなり広がっていき、とにかく国交回復だけ、日本国と中国との国交回復、それだけを第一義の目標にしています。

これをひっくり返すと、中国にとっての日本は何かという問題がありますが、それには竹内好はほとんど論評していません。日本で学者として暮らしを立てると、そういうことをやるようになってくるのですけれども、これを目を閉じてシャットアウトしてしまうのです。

中国にとって、自分が魯迅から学んでいることは、いったいどのような意味があるのか、そのよ

うな問題は問うことはありません。シャットアウトするのです。日本の学者では珍しいです。

この問題の立て方は、中国にとって、竹内好の思想は何かという問題の立て方と違います。また世界の文学にとって魯迅とは何なのか、世界の思想にとって自分とは何なのかという問題を立てたことがありません。

その問題を、この2日間にわたるシンポジウムで立てることになると思います。私は、答えを聞きたいと思います。

話は飛びまして、竹内好の出発ということを考えて、文献として残っているのは、「北京日記」です。この「北京日記」について、私は本当にびっくりしました。「北京日記」が出て、すぐ読んだのが丸山眞男の批評です。

丸山眞男は、この「北京日記」を読んで、この日記のなかに、当時、盛んに使われている日本の新聞の時局用語がまったく出てこない指摘しました。ここを見る丸山眞男の眼力は大変なものだと思います。また、丸山眞男が竹内好に向けたまなざしの重大さ、私は、その丸山の批評を読んでびっくり仰天しました。私は、竹内好をずっと読んできましたが、このようなまなざしを自分は持っていないと思いました。大変に驚きました。丸山眞男について最も驚いたのはそれです。

丸山眞男と竹内好の関係は大変注目に値します。統計をとったことはありませんが、丸山眞男が竹内好に対する言及はたくさんあります。作品をつくったことはないのですが、ものすごくあるのです。竹内好の丸山に対する言及は、本当にわずかで無いも同然です。

日本の学者、学界で言えば、丸山眞男は竹内好よりずっと大きいのです。問題にならないほど大きいです。だから大学などに入りますと、学生として丸山眞男は必ず読みます。その学生が保守的だとか、反動的であっても読みます。だから今の日本の学者のランクの付け方から言うと、こんなにも違います。しかし、丸山眞男は、なぜこんな



に竹内好を見ていたのか、ということにびっくりしました。

戦争中は注目していませんでした。しかし、戦後になって竹内好が書いたいくつかの評論で彼はびっくりしました。これは丸山眞男の知らない別世界だったのです。

それから、丸山眞男は、何度も何度も竹内好の家に行くのです。何か重大な仮説を考えると、竹内好のところへ行って話すのです。丸山眞男は大変なおしゃべりでした。自由主義者はだいたいおしゃべりでしょう。竹内好のところへ行ってしゃべりまくるのです。その間、竹内好がじっと聞いていて、「うん」とか何か言うのです。その反応が丸山眞男にとって重大だったのです。

そういう関係は、世界の学問の歴史でまれに珍しく成り立ちます。本当に珍しいです。私が知っている限りでは、デューイ (John Dewey) とミード (George Herbert Mead) の関係です。

脱線するといくらでも長くなってしまいますのですが。デューイの娘が、父親の伝記を書いたが、デューイにとって、ミードの意味、重さは大変に重いと言う。しかし、ミードにとってのデューイの重さはほとんど無いも同然でした。つまり、学問の歴史で見ると、デューイはものすごく有名で偉いです。ミードは、ほとんど知られていませんでした。1930年代の終わりに、私はアメリカに行きましたが、ほとんど知られていませんでした。

娘というのは、普通、父の娘になるものなのです。アナイス・ニン (Anais Nin) なんてそうでしょ

う。森茉莉がそうです。小堀杏奴もそうです。しかし、ジョン・デューイは偉い人だと思いました。私は、その父親の伝記を読んでびっくりしました。これは的確なのです。ミードがいなければデューイの哲学などはできません。よく見ていたと思います。それは、おそらく家のなかでの会話を聞いていたからでしょう。

竹内好と丸山眞男の関係もそうです。つまり、竹内さんの丸山眞男についての言及は、少ないです。丸山眞男の竹内についての言及は多い。ほとんど自分が思い付くとすぐに竹内にぶつけてみるという人でした。丸山眞男の「北京日記」の読みもすごいです。これは丸山眞男の実力を、私に知らせたものです。

ところが、若い人で実力がある人はいます。日本人は1億2,000万人いるのだから、全部が全部、駄目になっているわけではありません。そう思いたいです。私の偏見は日本の知識人はもう駄目という考え方ですが。しかし、面白い人もいます。今日、私のあとで話をされる岡山さんです。私から見ると、とても若い娘さんですが、おそらく竹内さんとは会ったことがないでしょう。「北京日記」を読んででしょう。「北京日記」で竹内さんは放蕩します。そこのカフェの従業員 (女給) は、おそらく竹内さんが生涯出会った最初の等身大の女性だったろうという指摘、これもびっくりでした。

「北京日記」の読みについて、私をびっくりさせたのは丸山眞男の他に岡山麻子です。今日、初めて会いました。こういうことが現実にあります。日本民族1億2,000万人を、私のように軽蔑的に扱うのは間違っています。私は無知ですね。

3つ目の問題の「中国文学研究所とその解散」に移ります。竹内さんは、何となく東大に行ってしまうのです。あとで自分を非常に憎むのです。やはり人間というのは、何となくすることが多いので、だいたい大阪高校に行くのも何となく行ってしまうのです。行って、学校についてもものすご

く後悔します。あこがれは三高です。京都まで来て、「こまどり」とかいう喫茶店に行くと、大高生である自分がとても肩身が狭いです。三高生がずらりといて、何となく三高生のほうが頭がいいような感じがするので、じっと座っているのだけれども落ち着かなくて帰って行くという話を書いてあります。

その前は東京の区立一中です。そこから大阪高校へ行くと。変ですね。また何となく東大に行くのです。東大へ行って、中国文学科に入ります。深く考えていないのです。

同級生のなかで、坊さんの子の武田泰淳は、漢文が抜群にできたそうです。竹内さんはあまりできなくて、フランス文学などにあこがれていました。また、漢文の東大教授になじめなかったのです。問題の取り上げ方もことごとく嫌でした。そして、自分の独自のサークルをつくる必要を感じて、見つけたのが武田泰淳です。この関係は非常に重要です。それからあと、先輩ですが、増田渉を引っ張ってきます。

このようにして、自分の仲間をつくることで現代中国文学と一緒に読んでいきます。武田泰淳みたいに自分よりもっと読める人が仲間になりました。先輩として増田渉もいます。このようにして広がっていくのです。

これは、当時の日本の知識人の現代中国に対する態度をひっくり返したものでした。仲間のつくり方が創造的です。そして、外務省からお金をもらって中国に行きます。そして、中国人にもものすごく感心します。普通の態度にとっても感心するのです。そのなかで現代中国文学を読む。はじめは魯迅に気が付かない。郁達夫なのです。

そして、続けて郭沫若を読むとか、呼ぶとか、いろいろなことがありました。そのうちに大東亜戦争が起こると、竹内好はもろ手を上げて賛成します。そして、自分が中心になってやっている中国文学研究にそのことを書きます。この宣言は、竹内好が自分で書いた文体です。

今まで中国文学を研究していて、中国と戦っているのが嫌で嫌でたまらなかったのです。憂うつな気分でした。しかし、東亜解放という旗印を立てた大東亜戦争を、国家がその旗印とすることによって憂うつが吹っ切れたと言うのです。

このことを戦後も、竹内さんは撤回していません。どういうことなのか、これがずっと、そのときの竹内さんが書いてきたものを見れば理解できます。

大東亜解放を旗印にするためにやっているのです。そうしたら当然に、日本が植民地にしている朝鮮と台湾を解放しなければいけないでしょう。戦争目的に邁進したら当然解放するでしょう。しなければ、まったく偽善的で駄目です。

それだけではなくて、その目的で国家を推進していけば、日本国家はつぶれるのです。つぶれる以外にない。そのことまで竹内さんの目標に入っている。まったく竹内さんという人は破滅的な人です。

だいたい、私は酒を飲まないから、本当に内部からはわからないのですが、酒を飲んで、飲んで、ぶっつぶれるのが竹内さんは好きです。だから、戦後も「風紋」という喫茶店へ行って、階段から落ちて瀕死の重傷で、救急車で病院に連れて行かれました。恍惚として、自分がなくなるということが人生の目的なのです。

国家の目的も国家がなくなることなのです。大東亜戦争は、そのきっかけなのです。そう読めば、戦後も竹内好が中国文学の宣言を撤回しなかったことがよくわかると思います。

その気分は、私が同時代として知っているもので言えば、E・M・フォースター (Edward Morgan Forster) の感じに非常に似ています。インドへの親近感、そしてインドを植民地にすることが非常に嫌で、第一次世界大戦のときから徴兵逃れでエジプトにずっといました。そして、インドへ行きました。

もう一人が、ジョージ・オーウェル (George

Orwell)です。これも奨学金をもらってイートン・スクールに行っていました。普通は、そこからオックスフォードかケンブリッジです。それが嫌なのです。奨学金もらってイートンに行くというのがとても嫌なのです。それはイートン出身というのは、例えば、ここに2つボタンをしていますが、これはオーウェルがわざとやっていました。普通イートン出というのは、2つボタンがあると1つしかないのです。だから、ぱっと見て、イートン出身だとわかるのです。そういうことが全部嫌になってしまうわけです。

オックスフォードにも、ケンブリッジにも行かずに、就職するためにビルマに行って巡査になるのです。逃れ道です。そして愉快地暮らしたかという、そうではない。ビルマで巡査をやってもイギリス人ですから落ち着かないのです。

あるとき、象が逃げてきました。巡査として退治しなければいけません。巡査として鉄砲を持っていました。みんな（ビルマ人）が逃げまどっているので何かしなければいけません。期待のまなざしを感じます。彼は、とにかくその象に目標を定めてバンと撃ちました。みごとに当たり象は崩れ落ちました。そのときに、ビルマ人の期待に応えたというまなざしと、ものすごく特権的な意思を公使したという嫌な感じとに挟まれました。

これが『象を撃つ』という実録小説で、ほとんどエッセイとか、記録に近い、初期の作品になりました。傑作です。それで、もう嫌になってイギリスに帰ります。イギリスに帰って、今度は浮浪

者になります。浮浪者になって彼は……。いくらでも脱線しそうだからやめます。

オーウェルのまなざしと竹内好のまなざしとは、比較文学的に非常に似ています。ナチスは嫌いだから、ナチスに対する英語の放送、国策ラジオをBBC（英放送協会）でやるプログラムを立てていました。偶然、私がそれを海軍の軍属としてジャワにいて聴きました。面白いプログラムでした。それはまた極めて脱線するから飛ばします。

さて、竹内さんのポジションというのは、兵隊に行ったときも、運良く中国人を殺さなかったらしいです。大変なことですね。竹内さんは、山のなかの小さな部隊にいました。竹内さんはのろいものだから中隊長に牛蒡剣で殴られたりしています。そして敗戦が来ます。そのときに中隊長が軍人に賜りたる勅諭（軍人勅諭）を不思議な読み方をしました。もともとあったのですが気が付かなかったのです。「我国の稜威（みみつ）振（ふる）はさることあらは汝等能（よ）く朕と其憂（うれひ）を共にせよ。」それに初めてぶつかるのです。今まで暗唱もしていたのに、わかっていなかった。

それは幼い天皇が、まだ自信がなくて、「おれがまずいことをやって失敗したときも助けてくれよ」という不安な声が聞こえてくるように感じたのです。ここがすごいと思います。やはり、大変立派な人が素読を授けてくれれば、そのように3歳、4歳の人に伝わるのではないのでしょうか。

今は、日本の教育の伝統のなかでまったく失われています。だからこの勅語も居丈高にきこえる。竹内さんはそのように日本語を読む術を知っているのです。大変なことです。だから竹内さんの文体の底にあって文体を支えるものだと思います。

そこから、また話は飛びますが、竹内さんは、「屈辱の事件」のなかに「そのときに明治の息吹にふれるような気がした」と書いています。

竹内さんは、明治維新百年祭を提唱します。そのとき竹内さんは、まったく民間でやりたいということでした。今の中国文学研究会と同じです。



つくられつつある明治維新とつくられた明治国家は違う、何とかさかのぼって行って、つくられつつある明治国家にふれる、つくられつつある明治維新にふれることができるのではなかろうかと思ったのです。

その計画は失敗しましたが、私は完全に失敗したとは思いません。それは竹内さんのそばにいて、影響を受けた人のなかに市井三郎がいたからです。市井三郎は、竹内さんとの長い付き合いのなかで、彼の思想を培いました。だから『歴史の進歩とはなにか』（岩波新書）を書きました。これは名著だと思います。戦後の名著の1つだと思うのですが、絶版になっていて手に入れるのが大変です。

簡単に私が市井さんの思想を要約しますと、科学とその科学を進める科学者の理想共同体（架空の観念的なもの）にとって進歩はあります。なぜかという、科学者のやったことは先例があるのか、なければ、これは盗んだから駄目です。それから、論理のかたちを壊しているのか、これも駄目です。もう1つ、経験にかかわることは、実験によって追試できているのかということで、その科学者の理想共同体にとっては進歩があり得ます。

しかし、今は、ものすごく金もかかります。科学技術としてとらえると、ビッグ・サイエンスになります。すると国家からの補助があります。国家に対して、非常に敏感に批判的な人間が科学者である場合には避け得るけれども、そういう人は明治末期から、大正、昭和、平成ではもういません。

最後には、すごいことになっています。文部大臣が公式の説明で科学補助金をもっとたくさん出すから、そのうちにノーベル賞受賞者が日本人で30人増える、と言ったではないですか。これはスロットマシンと同じです。100円入れる、チューインガムが出てくる、また100円入れる、またチューインガムが出てくる。創造的な科学者の頭

のなかに起こることをスロットマシンをモデルにして考えています。

文部科学省の大臣が言うのですから、これはすごいと思います。日本国家の文化のレベルを、この1つのエピソードで象徴していると、私は、日本国家に対してそのような偏見を持っています。

こういうときに、ビッグ・サイエンスが全部そういう方向に向かうのです。それを国家が支持して、国家とともに科学技術文明が進歩していると、アメリカ合衆国なるものは思い込んでいます。旧ソビエト連邦もそう思い込んでいたのです。日本国も思い込んでいます。みんな駄目です。

進歩というものを、人間が自分に責任がなくて苦しめられないような状態、市井三郎が定義した、そういう方向に、科学技術文明は向かっていないのです。それが、市井三郎がつくり出したテーゼです。

彼は哲学科出身ではありません。戦争中の阪大のケミストリー出身です。竹内さんの影響下にあって考えたから、独自にこの考え方を進められたのです。だから、共産主義をテーゼにするかどうかなど非常に小さなことです。竹内さんが共産主義と聞いただけで、これは進歩の上の段階だと思わなかったという、その考え方の影響を受けています。

竹内さんは、共産党にまったく屈服しませんでした。ただ友好的な関係を持って保留しています。これは大阪高校にいたときの周辺が証明しています。戦後もそうです。共産党批判を書きました。つまり、その間、魯迅を読んでいるのですが、ゆっくり読んでいるから全部丸のみにしません。「はじめはよくわからない」と、第一『魯迅』で、竹内さんが書いています。

もう最後の最後は、京都に来て岩波書店の講演をしましたが、このころになって、『故事新編』を熱中して読むようになります。これは竹内さんを、繰り返し批判した花田清輝の影響です。花田清輝は、竹内さんをからかって「国家、国家、国

民文学、国ばかりに向かって、そんなにも国が好きならば、国内好と改名したらいいだろう」と悪口を言っています。これは、うまいです。「よしみ」というのは、「好」きと書くのですから、国の内において、国が好きというのはピッタリです。私は、大変うまい例えだと思いました。しだいに花田清輝の影響が竹内さんに浸透してきて、神話の世界、『故事新編』が竹内好の中に入ってきた。

私は、竹内さんが亡くなる前に何度も見舞いには行きませんでした。最後の見舞いに行ったとき、毎日ある時刻が来ると、般若豊（埴谷雄高）が見舞いに来る。病室のなかは暑いと言って、ほとんど裸になってしまい、もうちゃらんぼらん治る話ばかりを言っている。ところが、埴谷は病室を一步出ると、「葬儀の段取りをどうするか、追悼演説を誰に頼むか」という話をしました。まったくの二重人格で驚きました。

竹内さん自身は、今から思うと、もうすぐ自分が死ぬと知っていたと思います。私に「今、何を書いているか」と、私は「『アメノウズメ伝』という本を書いている、初めて神話を扱った」と言いますと、すぐに竹内さんは、「レコードに1面と2面があるだろう。今あることをきちんと見て、

事実と考えられているものを1面とすると、2面のほうで、ものの見方、想像力が自由に動いていくような、そういう面を用意して、二重の面をいつでも、かけかえしていくことが必要だ」と言いました。びっくりしました。相手はもうすぐ死ぬ人なのです。また、もう1つ言いました。

「自分は、漫画を読む術を持っていない。だけど漫画世代を決して軽蔑していない。漫画世代が、どのように魯迅を読むかを楽しみに待っているんだ」と。漫画をものすごく読んでいた四方田犬彦はやがてそういう本を書いた。彼の書いた『魯迅』は素晴らしいです。

竹内さんは未来を考えていました。竹内さんが古典から引いたものは、「疑うを疑うもまた信ずるなり」。そういう道が開かれていました。これは面白いです。

私は、竹内さんから驚くべき影響を受けました。竹内さんは、中国が自分をどのように見るかということに全然問題にしたことがありません。その反対の側からの問題の立て方が、この2日間のシンポジウムのなかであられることを私は楽しみにしています。



●—司会 溝口先生、鶴見先生、どうもありがとうございました。竹内が魯迅から引いて用いた言葉に「一片真切」という言葉があって、それは「言葉の不自由を知りつつ、なおかつ吐く言葉」ということです。

鶴見さんのお話の仕方は、文字どおり竹内の言う一片真切の言葉のように聞こえました。

これから5分ほど休憩に入ります。その後、1時間の討論をいたします。フロアのほうにも討論の機会を用意しますので、よろしく願いいたします。